ド技師の銅像が建立され盛大な除幕式があげられた。これに先立ち銅像建設期成会の委員長をしていた倉内孝治氏はクロフォード技師の三男で、アメリカ・イリノイ州シカゴ市ジャクソン

送られてきたカレンダーに見入る倉内氏

たきじ忘①

昭和八年二月二十日、小樽の生んだプロレタリア作家小林多喜二は特高警察の手で拷問のすえ虐殺された。二十九歳五カ月だった。それから二十七年、彼をしのぶ二十七年忌の行事が老いた実母のいる小樽でも二十日盛大に行なわれる。思えば多喜二の死は悲惨そのものだったが、彼の死に象徴されるその時代の暗い記憶をいまだに忘れ去ることのできないのはなぜだろう。不幸を再びくりかえさないため――そして一つには作家多喜二の手向け草に、この〝たきじ忘〟をささげる。

（題字は多喜二の母せきさんの筆）

絵を勉強していた少年時代の多喜二（左端）円内は小学一年生の頃

学校と多喜二

極貧の中の中の

矛盾に素朴な正

★……

明治四十年の春、小林家の一家五人は食えなくなって故郷の秋田県下川沿村から小樽に移住した。多喜二はそのとき四歳だった。父末松は官作兼小作農、母せきは日雇の娘、多喜二の伯父で新富町でパン店を営んでいた小林慶義を頼って若竹町に落ち着いた一家はそこでささやかな菓子屋を開いた。彼は〝[illegible]〟の生活をこう書いている。

〝父は昼近くなると、四方硝子の二三段棚のついた二つの箱に、大福やパンを並べて、それを担いで土工夫の働いているところへ売りにいった〟

一家が若竹町に店を定めた年の五月から小樽港の第二期築港工事がはじめられ、付近にはバラックの監獄部屋が建ち並び数百人の土工夫が送り込まれていた。食いつめて小樽に来ていた一家にとってもやはり〝食べるものは[illegible]〟のように、いつまでも私の心に残されている〟と書いた。

★…大正五年三月彼は潮見台小学校を皆勤賞を受けて卒業、庶立小樽商業学校（現在の緑陵高校）に入学した。これは伯父の経済的援助によるものであり、その条件として彼は伯父の家に住み込み学校から帰ると職工といっしょになって製パン工場の手伝いをさせられた。夏休みには潜水夫にポンプで空気を送り込むアルバイトをやり、それでえたわずかな賃金を家に送ったりしたが〝その仕事はあまりにも単純で、どんな激しい労働よりも辛かった。それは刑務所の仕事とどこか似ている〟と彼はそのころの思い出を自伝的随筆のなかで語っている。彼が情熱をこめて打ち込んでいた絵も本科三年十七歳の時に伯父から〝少し黙っていれば、勉強もそっちのけにして増長しやがる〟とし っ責され、彼は〝涙を出るだけ出して〟断念した。こうしたなかで、彼の毎日のたったひとつの楽しみは伯父の家から学校まで約一里半の道すがら自分の夫

うや食わず〟の生活が続いた。

★……

こうした環境のなかで多喜二は明治四十三年潮見台小学校に入学した。彼の家の付近一帯は長屋がゴミゴミと建ち並び、ジクジクと湿っぽい薄暗く陰気な細民街であり、六百人ほどいた通学生の大半は港で働く日雇や、彼のような貧しい小商人の子供たちだった。小学校時代の彼は無口で、どことなく陰気で沈みがちな少年であり、遊び友だちも少なかった。ひとつには彼の秋田弁が級友の間でめずらしがられ、よくからかわれたからだった。またとくにすぐれた学科もなく自立たない生徒だったが、ただ勝負に対する執着が強く、負けたときなどは露骨にくやしがったという。貧しいがためにみじめな思いをすることが多かったが、そのようなとき彼は〝八つか九つの子供らしくもなくギリギリとくちびるをかん〟でたえたが、その屈辱感を〝あたかも針に刺みこんだ爪

補正予算案、衆院を通過

十九日成立の見通し

北海道新聞

こくておいしい
KAGOME SAUCE
カゴメソース

たきじ忌 ①

昭和八年二月二十日、小樽の生んだプロレタリア作家小林多喜二は特高警察の手で拷問のすえ虐殺された。二十九歳五ヵ月だった。それから二十七年、彼をしのぶ二十七年忌の行事が老いた実母のいる小樽でも二十日盛大に行なわれる。思えば多喜二の死は悲惨そのものだったが、彼の死に象徴されるその時代の暗い記憶をいまだに忘れ去ることのできないのはなぜだろう。不幸を再びくりかえさないため——そして二つには作家多喜二の手向け草に、この"たきじ忌"をささげる。

（題字は多喜二の母せきさんの筆）

絵を勉強していた少年時代の多喜二（左端）円内は小学一年生の頃

学校と多喜二

極貧の中の生活

矛盾に素朴な正義感注ぐ

★……明治四十年の暮れ、小林家の一家五人は食えなくなって故郷の秋田県下川沿村から小樽に移住した。多喜二はそのとき四歳だった。父末松は日雇小作農、母せきは日雇の娘、多喜二の伯父で新富町でパン店を営んでいた小林慶義を頼って若竹町に落ち着いた一家はそこでささやかな駄菓子屋を開いた。彼は"転形期の人々"でこの当時の生活をこう書いている。

"父は昼近くなると、四方銷子の三三段棚のついた二つの箱に、大福やパンを並べて、それを担いで土工夫の働いているところへ売りにいった"

一家が若竹町に店を定めた年の五月から小樽港の第二期築港工事がはじめられ、付近にはバラックの監獄部屋が建ち並び数百人の土工夫が送り込まれていた。食いつめて小樽に渡ってきた一家はどこでもやはり"食うや食わず"の生活が続いた。

★……とうした環境のなかで多喜二は明治四十三年潮見台小学校に入学した。彼の家の付近一帯は長屋がゴミゴミと建ち並び、ジクジクと湿っぽい薄暗く陰気な細民街であり、六百人ほどいた通学生の大半は港で働く日雇や、彼のような貧しい小商人の子供たちだった。小学校時代の彼は無口で、どことなく陰気で沈みがちな少年であり、遊び友だちも少なかった。ひとつには彼の秋田弁が級友の間でずらしがられ、よくからかわれたからだった。またとくにすぐれた学科もなく自立たない生徒だったが、ただ勝負に対する執着が強く、負けたときなどは露骨にくやしがったという。貧しいがためにみじめな思いをすることが多かったが、そのようなとき彼は"八つか九つの子供らしくもなくギリギリとくちびるをかん"でたえたが、その屈辱感を"あたかも柱に刺みこんだ爪のように、いつまでも私の心に残されている"と書いた。

★…大正五年三月彼は潮見台小学校を皆勤賞を受けて卒業、庁立小樽商業学校（現在の緑陵高校）に入学した。これは伯父の経済的援助によるものであり、その条件として彼は伯父の家に住み込み学校から帰ると職工といっしょになって製パン工場の手伝いをさせられた。夏休みには潜水夫にポンプで空気を送り込むアルバイトをやり、それでえたわずかな賃金を家に送ったりしたが、"その仕事はあまりにも単純で、どんな激しい労働よりも辛かった。それは刑務所の仕事とどこか似ている"と彼はそのころの思い出を自伝的随筆のなかで語っている。彼が情熱をこめて打ち込んでいた絵も本科三年十七歳の時に伯父から"少し黙っていれば、勉強もそっちのけにして増長しやがる"としっ責され、彼は"涙を出るだけ出して"断念した。こうしたなかで、彼の毎日のたったひとつの楽しみは伯父の家から学校まで約一里半の道すがら自分の未来をあれこれ想像することだった。十二、三歳のときの青年士官十四、五歳の鉱山王から"センチメンタルな十六、七歳になると自分はこんどは無条件に文豪になることを考えた"といっているが、後年の彼は友人に"模がなりたかった音楽家、画家、小説家のうち一番金のかからない文学を選んだ"と述懐している。いずれにしても絵をやめたことは彼の目を文学に向かわせる契機を作った。小樽商業の校友会誌"尊商"を編集する一方回覧雑誌を発行してそれらにいくつかの小品をのせはじめた。彼の周囲には親しい文学グループができていた。

★…"庁商"もそうであったがそれにもまして大正十年彼が入学したころの小樽高商は自由主義的ふんいきが濃かった。校風はまたかなりの年月が必要だった。

小樽商業の校友会誌『尊商』と彼の書いた"呪われた人"と題する文章

東京で世界輸血学会が開かれるが、これに関連し、市営としては全国唯一の血液銀行である小樽血液銀行の所長小田柿栄一郎氏＝写真＝のもとに最近相ついでハワイ、パリ、サンフランシスコなどから招待状が届いている。

まずサンフランシスコ血液銀行のヒル所長からは"八月二十二日から五日間サンフランシスコ

れるので、ぜひ出席して、日本の血液銀行の状況説明をし、また全米の関係施設をみてほしい"という便りがあり、続いてパリの国立血液銀行のスーリー所長からも"七月か十月ごろヨーロッパの実情を視察にきてほしい"という便りがきた。また別に安達市長のもとにもホノルル市のハワイ血液銀行のピンカートン所長から便りが届き"ハワイの血液銀行の施設、業務の状況を視察し、研究させるため年

北海道の足がかりをつくった。昭和三十一年夏、この本道鉄道建設の大原人の碑をしのび、ゆかりの埋手宮駅構内にクロフォード技師の銅像が建立され盛大な除幕式があげられた。これに先立ち銅像建設期成会の委員長をしていた倉内孝治氏はクロフォード技師の三男で、アメリカ・イリノイ州シカゴ市ジャクソン

送られてきたカレンダーに見入る倉内氏

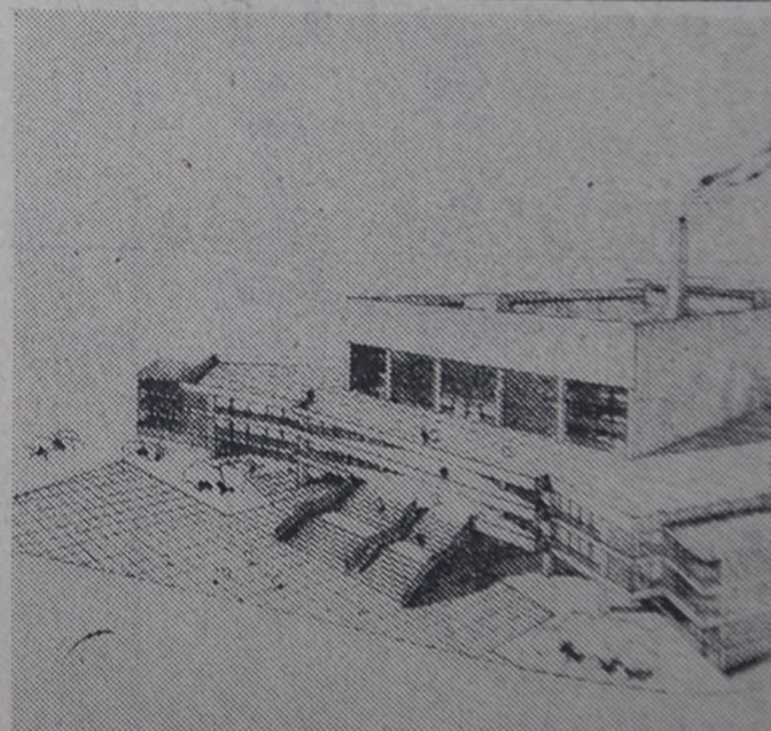
A案か、

市民会館の

新年度予算に八百万円の建築費がはじめて計上された市民会館は、敷地も現公会堂跡と決まり、新年度からの着工が待たれているが、市建築課と矢野建築設計研究室（東京）が共同設計した二つの建とおり。

A案 鉄筋鉄骨造り三階建、建築面積延べ六、二六三平方㍍（一、八八七・九坪）大集会室収容人員千五百人、集会室大小七室、展示ホール三三〇平方㍍（一〇〇坪）食堂二〇〇平方㍍（六六坪）その他管理部門としてボイラー室、機械室を配置する。総工費約二億五千万円。

B案 鉄筋鉄骨三階建、建築面積延べ六、一一七平方㍍（一、八五三・九坪）大集会室収容人員千三百人、集会室大小十一室、展示ホール三三〇平方



職場と多喜二

大正13年に拓銀へ

大正十三年三月、多喜二は小樽高商を卒業して北海道拓殖銀行に入行した。昭和四年十一月に解雇されるまで銀行生活はわずか五年半だったが、この短い期間にめざましい変ぼうと飛躍を遂げながらプロレタリア作家としての地位を確立した。最初の三年間は模索の時代だった。貧しい惨めな人々を小説のなかで描くとき変革されない"現在"のうちで"救い"を与えようとしていた。だが現実と彼の"救い"との食い違い――彼のうちにうっ積するこの矛盾を手を汚さないヒューマニズムでは解決することができなかった。昭和二年二十四歳のときに書いた小説"最後のもの"は、その模索時代に終止符を打った文学とおり最後のものとなった。これ以後ははっきり社会主義者としての自覚と決意をもってひたむきに前進していった。

父の死で上京断念

札幌の本店で一ヵ月間講習を受けたあと小樽支店計算係に配属され、そこで実務を見習い、二ヵ月後に為替係にまわされた。

銀行員生活は"早く卒業して月給取りになり貧乏な親たちを助けたい"と思っていた"と自分から選んだものだった。拓銀に入った大正十三年、身辺に二つの大きな出来ごとがあった。父末松の死と田口たきとの結婚。父と知り合ったときという酌婦だった。父の死後は支柱となって一家の生計を見なければならなくなったことを意味した。このためできるだけ早く東京に出て文学に専心したいという願いも一応断念するほかなかった。この年の四月、小樽、高商時代の文学グループを集めて同人雑誌"グルテ"を発刊、それにいくつかの短編小説を書いて創作への渇望をいやしていた。

ソバ屋の女に愛情

同じ年の十月ごろ好奇心から友人と連れだって入船町の"ソバ屋"に出かけた。ソバ屋のノレンを下げてはいたが、そこには"売られた"女たちがいた。田口たきもその一人だった。彼女は父が商売に失敗したため七人の弟妹の犠牲となってなにも知らずに室蘭の飲酒屋に売られた。その後小樽のソバ屋に転売されたが、その間に彼女の父は鉄道自殺をしてしまっていた。多喜二と知り合ったとき彼女はまだ十六歳だった。たきを深く知れば知るほど美しく、聡明な彼女にひかれていった。彼女の置かれていた悲惨な境遇に自分がかつてなめた苦しみとのキズナを見出したのだろうか。たきにあてた手紙のなかでこういっている――。

"ヤミがあるから光がある。そしてヤミから出てきた人こそ一番ほんとうに光のありがたさがわかるんだ。世のなかは幸福ばかりで満ちているものではないんだ。不幸というものが片方にあるから幸福ってものがある。そこを忘れな

たきぢ忘

②

いでくれ"

多喜二は彼女を救い出し、五年後に結婚を申し込んだが、幼い弟妹を養わねばならなかった彼女は多喜二の負担となることをおそれて断わった。

かなえられ

変ぼうと飛躍

北海道新聞
発行 北海道新聞社
札幌市大通西3丁目
電話（代表）
振替口座（小樽）
© 北海道新聞社

KOYO
光陽研磨材
光陽研磨材株式会社
光陽社
東京足立小台電911-代表二四一一六

市建築課と尾野建築設計研究室（東京）が共同設計した二つの建築物。収容人員千三百人、集会室大小十二室、展示ホール三三〇平方

職場と多喜二

大正13年に拓銀へ

大正十三年三月、多喜二は小樽高商を卒業して北海道拓殖銀行に入行した。昭和四年十一月に解雇されるまで銀行生活はわずか五年半だったが、この短い期間にめざましい変ぼうと飛躍を遂げながらプロレタリア作家としての地位を確立した。最初の三年間は模索の時代だった。貧しい惨めな人々を小説のなかで描くとき変革されない"現在"のうちで"救い"を与えようとしていた。だが現実と彼の"救い"との食い違い――彼のうちにうっ積するこの矛盾を手を汚さないヒューマニズムでは解決することができなかった。昭和二年二十四歳のときに書いた小説"最後のもの"は、その模索時代に終止符を打った文学とおり最後のものとなった。これ以前はっきり社会主義者としての自覚と決意をもってひたむきに前進していった。

父の死で上京断念

札幌の本店で一ヵ月間講習を受けたあと小樽支店計算係に配属され、そこで実務を見習い、二ヵ月後に為替係にまわされた。銀行員生活は"早く卒業して月給取りになり貧乏な親たちを助けたいと思っていた"と自分から選んだものだった。拓銀に入った大正十三年、身辺に二つの大きな出来ごとがあった。父宋松の死と田口たきという酌婦と知り合ったことだった。父の死後は支柱となって一家の生計を見なければならなくなったことを意味した。このためできるだけ早く東京に出て文学に専心したいという願いも一応断念するほかなかった。この年の四月小樽時代の文学グループ同人雑誌"グラルテ"を発刊、それにいくつかの短編小説を書いて創作への渇望をいやしていた。

ソバ屋の女に愛情

同じ年の十月ごろ好奇心から友人と連れだって入船町の"ソバ屋"に出かけた。ソバ屋のノレンを下げてはいたが、そこには"売られた"女たちがいた。田口たきもその一人だった。彼女は父が商売に失敗したため七人の弟妹の犠牲となってなにも知らずに室蘭の銘酒屋に売られた。その後小樽のソバ屋に転売されたが、その間に彼女の父は鉄道自殺をしてしまっていた。多喜二と知り合ったとき彼女はまだ十六歳だった。たきを深く知れば知るほど美しく、聡明な彼女にひかれていった。彼女の置かれていた悲惨な境遇に自分がかつてなめた苦しみとのキズナを見出したのだろうか。たきにあてた手紙のなかでこういっている――。

"ヤミがあるから光がある。そしてヤミから出てきた人とそ一番ほんとうに光のありがたさがわかるんだ。世のなかは幸福ばかりで満ちているものではないんだ。不幸というものが片方にあるから幸福ってものがある。そこを汚れないでくれ"

実際運動にひかれる

多喜二は彼女を救い出し、五年後に結婚を申し込んだが、幼い弟妹を養わねばならなかった彼女は多喜二の負担となることをおそれて断わった。

詩人の肖像"のなかで多喜二にふれて"彼は売笑の巷にいる女性に近づいてこれを救おうと苦しんだようである。その問題を解決できないことと文学的野心とが彼を実際運動の世界に、また田口たきとの恋愛は飛躍と変ぼうの生活、境遇、意識、芸術と離し切れない交互作用から来ています"と書き送っている。だが、"実際運動に入りかける"までには、年々上がる月給を楽しみに毎日銀行へ行き貯金し、おとなしいきれいな細君をもらいのん気に生活する。そこにはなんら非難すべき点はない。同僚たちはみなそうした プロレタリア文学に駆りたてたのであったらしい"と書いているが、多喜二自身もそれを裏書きするように昭和三年二十五歳の春に兄事していたある作家に"私は必然的に実際運動に入りかけています。それは自分考え、そうなるために生活している。だがそういう生活には大きな罪悪がある"ということに気づいてはいたものの、自分が"社会主義的情熱を永久に持てぬ"人間のように思われ、また自分の内部にある"インテリらしさ"と過去の"赤貧洗う生活"の記憶との同居に悩み、これに自家の生活やたきとのこともからんで"周期的にさびしくなったり愉快になったり"あるときは"憂うつだ、自殺したくなるまで"という不安定な生活を続けていたのだった。

喫茶店で読書に没頭

多喜二は優秀な銀行員だったといわれている。また大変な読書家、勉強家だったが、そのために自身の仕事と職場を要領よくマッチさせ勤務時間をフルに活用していた。小樽支店の店舗の構造は細長く奥行きが広く、彼がいた為替係は支店長の席から一番遠い入り口近くにあった。地の利を得た彼は一日の仕事をテキパキと片付けるとあとは読書したり原稿を書いたりしていた。また為替係から調査係にかわったあとも時たま調査にゆくと称して銀行を抜け出した。そんな時はきまって妙見河畔にあった喫茶店で読書に没頭していた。拓銀時代はよそ目には気さくな、一言でいえば平凡な銀行員として振る舞っていたから深いつきあいのなかった同僚たちには、彼があのような大それた主義者であろうとは思いもつかなかった。しかしすでに"一九二八・三・一五""蟹工船"などを発表していたが、これらはいずれも発禁となった機関誌"戦旗"に発表されたため多喜二の名は広く知られてはいなかった。だが拓銀をやめる前年の昭和三年ごろ"おれはこのごろ特高刑事に目をつけられ、ときどき銀行に照会にくられ""家へ巡査がきた""家宅捜査されて拘引された。どう成り行きがかわってゆくか見当がつかない"などと友人に手紙を書いているように、身辺にはすでにただならぬ気配が感じられる。昭和四年中央公論に"不在地主"を発表して依頼免のかたちで解雇されたが、二十六歳の彼はすでに新進プロレタリア作家としての声価を得ていた。

（「蟹工船」・多喜二の母せきさんの話）

かなえられぬ恋

変ぼうと飛躍の五年半

拓銀の行員時代の多喜二と愛人の田口たき

きしておくとくれぐれも市建築課もあるので市建築課ではコンクリ

年施工（第三公論前面（二六八）昭和二十八年施工）の三ヵ所ある

福田長相は十六日午後閣内で蔵相、藤山外相と会って、高碕達之助氏（大日本水産会会長）を第四回日ソ漁業交渉の政府代表としてモスクワに派遣する時期について話し合った結果、この時期は三月中旬とする。の具体的な日取りなどは交渉の進捗状況などを考慮して決める。

母親せきさんも出席

多喜二をしのぶ座談会

小樽が生んだプロレタリア作家小林多喜二逝いて二十七年、樽労を中心とする〝多喜二祭実行委員会〟では十九日午後六時から市議事堂で記念映画祭、命日に当たる二十日は午後一時から北海ホテルに多喜二の母せきさん(八八)、生前親交あった作家の中野重治氏を東京から招いて〝多喜二をしのぶ会〟を開いた。

会場別室には多喜二の著書、原稿、無惨な最後をとげた当時の写真、青銅製のデスマスク、肖像画など遺品がならべられ、参会者の思いをあらたにさせていた多喜二の実姉佐藤チマ子さん(六二)とその夫藤吉さん(六五)＝市内朝里町一〇九＝に手を引かれせきさんも定刻に姿をみせ〝多喜二のために、こうしてみなさんに集まっていただいてお礼申し上げます〟と謝辞を述べていたが、かたわらの中野氏もなつかしそうに〝おばあちゃんも元気で……〟と再会を喜び合っていた。

なお同五時半から市議事堂で中野氏を講師に記念講演会も催された。

多喜二をしのぶ会に出席した母せきさん（左から三人目）その右隣が中野氏

たきこじ忌 ③

愛された明るい母

たえず母を気にかけ

多喜二は肉親や友人たちに楽しい思い出しか残さなかった。生一本な情熱家だった彼のくったくのない明るい性格は多くの人々から愛されていた。多喜二が現在やや伝説的な人物となりかけていることも、死後にもなお人々が彼に寄せる愛情のあかしと見るべきなのかもしれない。以下は生前の彼をしのんで、彼をよく知る在樽の人々が語るありし日の多喜二の一面である。

八十八歳の母親せきさんはいまも元気で暮らしている

母親せきさん

〝母は帰りがけに自分はもう六十だから明日にも死ぬことがあるかもしれない。が、死んだということが分ればやっぱりひょっとお前が自家へ来ないとも限らない。そうすれば危いから死んだということは知らせないようにしたよ、といった。母がこれだけのことを決心してくれたことには私は身が引きしまるような激動を感じた。私は黙っていた。黙っていることしか出来なかった〟――小説『党生活者』のこの一節は多喜二と母せきさんが最後の別れとなるかもしれない人目をさけた面会の情景を描いたものといわれる。この当時多喜二は特高に追われ地下生活を続けていた。拷問でひん死だった彼は〝このことを一番最初に母に知らせてほしい〟といって息を引き取ったという。

せきさんは ことし八十八

多喜二の死後二十七年、市内新光町九五の娘ちまさんのとつぎ先でひっそりと余生を送っている。高齢なだけに記憶が薄れ話しぶりもほとんど合いづちを打つだけだが、多喜二のことは彼の少年時代の思いがけない小さなことまでときどき思い出してかたわらのものにポツリ語るという。『多喜二は自分のしていることを家で話すことはめったにありませんでした。拓銀に就職することにも一言の相談もなかったですよ。クビになったことも夜遅く帰って来て寝ていた私を〝お母さん、面白い話があるから起きなさい〟とムリにゆり起こし打ち明けるといったふうでした。家では、私たちによけいな心配をかけまいとつとめて明るく無とん着に振る舞っていました。私も一時は家をもらったら運動をやめるかと思って結婚をすすめたこともありましたが、多喜二がたぶあの方の運動に入ったかはどうしてもわから

北海道新聞
発行
北海道新聞社
札幌市大通西3丁目
電話（代表）
振替口座（小樽）
本社 東京・千代田・大手町
社長 神垣文市

安田火災海上

北海道新聞

外相説明だけすぐ

たきぎじ忠 ③

愛された明るさ

たえず母を気にかける

多喜二は肉親や友人たちに楽しい思い出しか残さなかった。生一本な情熱家だった彼のくったくのない明るい性格は多くの人々から愛されていた。多喜二が現在やや伝説的な人物となりかけていることも、死後にもなお人々が彼に寄せる愛情のあかしと見るべきなのかもしれない。以下は生前の彼をしのんで、彼をよく知る在樽の人々が語るありし日の多喜二の一面である。

八十八歳の母親せきさんはいまも元気で暮らしている

母親せきさん

"母は帰りがけに自分はもう六十だから明日にも死ぬことがあるかもしれない。が、死んだということが分ればやっぱりひょっとお前が自家へ来ないとも限らない。そうすれば危いから死んだということは知らせないよう番頭初に母に知らせてほしい"といって息を引き取ったという。

せきさんはことし八十八歳、多喜二の死後二十七年、市内新光町九五の娘ちまさんのとつぎ先でひっそりと余生を送っている。高齢なだけに記憶が薄れ話しぶりもほとんど合いづちを打つだけだが、多喜二のことは彼の少年時代の思いがけない小さなことまでとぎどき思い出してかたわらのものにポツリ語るという。『多喜二は自分のしていることを家で話すことはめったにありませんでした。拓銀に就職することにも一言の相談もなかったでしょ。クビになったことも夜遅く帰って来て寝ていた私を"お母さん、面白い話があるから起きなさい"とムリにゆり起こし打ち明けるといったふうでした。家では、私たちによけいな心配をかけまいとつとめて明るく無とん着に振る舞っていました。私も一時は嫁をもらって運動をやめるかと思って結婚をすすめたこともありましたが、多喜二がなぜあの方の運動に入ったかはどうしても分からないかったですよ。母がこれだけのことを決心してくれたことには私は身が引きしまるような感動を感じた。私は黙っていた。黙っていることしか出来なかった。――小説『党生活者』のこの一節は多喜二と母せきさんが最後の別れとなるかもしれない人目をさけた面会の情景を描いたものといわれる。この当時多喜二は特高に追われ地下生活を続けていた。拷問でひん死だった彼は"このことを一生誰にもいうなよ、といった。母がこれだけのことを決心してくれたことには私は身が引きしまるような感動を感じた。私は黙っていた。黙っていることしか出来なかった。――小説『党生活者』のこの一節は多喜二と母せきさんが最後の別れとなるかもしれない人目をさけた面会の情景を描いたものといわれる。この当時多喜二は特高に追われ地下生活を続けていた。拷問でひん死だった彼は"このことを一生誰にもいうなよ"といった。母がこれだけのことを決心してくれたことには私は身が引きしまるような感動を感じた。私は黙っていた。黙っていることしか出来なかった。――小説『党生活者』のこの一節は多喜二と母せきさんが最後の別れとなるかもしれない人目をさけた面会の情景を描いたものといわれる。この当時多喜二は特高に追われ地下生活を続けていた。拷問でひん死だった彼は"このことを一

勝見茂のこと

"勝見茂から業山嘉樹の『淫売婦』を借りて読む。自分にとっては少なくとも記念すべき出来事である。自分には文字どおりステッキをふりながら小樽の街をカッ歩していたあの当時の多喜二は一番幸福な時代だったのではないかと思われる。

電気館のマス席に田口たきさんと連れだって映画を見にきていた彼の姿をときおり見かけた。いわゆる遊び友達で彼が上京するまではほとんど毎日のように会っていたが、最初のうちは実際運動に入っているとはとても思われなかった。ただ、何か事があったとき君たち敵にはなからかわった調査係は織田勝恵さんと二人きりだった。勝恵さんは彼が拓銀を解雇される直接の原因となった小説"不在地主"の執筆を原稿の浄書などをして援助した人でもある。"不在地主"の原稿料の一部で勝恵さんにチリメンの羽織をおくった。『とにかく便所にまで本をかかえてゆくほどの大変な勉強家でした。たまたま小林さんに頼まれて忘れ物を取りに彼のロッカーをあけたところ、そこに当時発禁の『戦旗』というナップ（全日本無産者芸術連盟）の機関誌があり、彼がいわゆる『主義者』であることをはじめて知りました。その時はいっそのこと支店長に知らせようかとずいぶん迷ったものです。とにかく彼には一日中何回となくふだんの表情と変わりませんでしたが、お母さんのことを気にかけ不在地主の原稿料の大半をお母さん名義で預金していましたこれは勝恵さんの話である。

藤橋茂氏

織田勝恵さん

異性の同僚

多喜二が昭和三年七月為替係

モデルの源重さん

多喜二の初期の傑作"一九二八・三・一五"に出てくる"関羽そっくりの鈴木"は小樽労働運動の草分けである鈴木源重氏（現市議）をモデルに書いたものらしい。いわゆる三・一五事件、四・一六事件などで弾圧により崩壊した小樽の労働組合の再建に多喜二や鈴木氏たちは奔走した。鈴木氏はいう。『はじめのころ小林君は年も若かったし表面的な活動をしていなかった。いわゆるシンパだったわけだ。当時組合費は三十銭だったがこれでは同志の札幌への出張旅費にもこと欠く始末で、こんな時の貴重な存在が小林君だった。よく拓銀の窓口に出かけ旅費を無理したものだ。三・一五でつぶされた小樽合同労働組合の再建のときには、小林君が結成宣言の作成を受け持ったがあまりにも戦闘的だというので理論家で知られた古川友一との間に論争があった。古川がやっきになってまくしたてるのをやんわりと受け止めて反論していたのは印象的だった』

鈴木源重氏

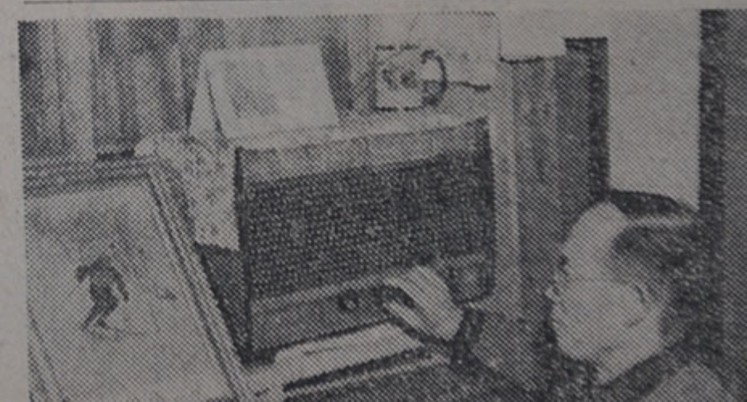
電話がかかってきていました。いま考えると多分細胞からの連絡だったのではないでしょうか。小林さんは『ナニ、英語の研究会さ』などといっていましたが、銀行をクビになったときも以前から覚悟していたようで

節水しましょう

このままでは水源池が枯れる

十五年ぶりの冬季渇水で来月中旬の正常給水が危ぶまれ、ピンチに立たされている市水道部では、市民にいっそうの節水を呼びかけている。現在のペースで水が使われていけば奥沢水源池の水は来月上旬でからっぽになり、中旬の給水がにっちもさっちもいかなくなるわけ。頼みの綱は来月上旬の暖気で、もし暖気がくると川の水量が増し、なんとか切り抜けれるが、相手は天候のことでどうなるかわからず、ぜひ節水に協力してほしいと市民に呼びかけている。

市民の水道水利用状況を調べるため、市水道部では先週市内を十二地区に分け、午後十一時から午前二時まで四日間、夜間見回りをしたが、この結果放水のしっぱなし七十八件、故障で放水または漏水していたもの百四十一件、音響で近くに漏水のあることが確認されたもの二十六件で、この推定減水量は約二千立方メートルものぼっている。この調査は深夜であることと、雪のために専用せんについては全戸数の二割くらいしか確認できなかったので、実際にはさらに二千立方メートルほどが放水されているとみられている。結局全体では一日約四千立方メートルほどがムダに放水されているわけ。現在の河川流量と三月下旬に期待される暖気で、この全使用量の約一割に上る放水がなくなると制限給水しなくてもほぼ間に合うと思われるので、凍結防止のための放水は避け、故障はできるだけ早く連絡して節水に協力してほしいと望んでいる。



郷土と作品

たこぶ忌 ④

庶民の体臭を描く

愛し続けた北国の町

『転形期の人々』を書き始めたころの多喜二

多喜二が生活していた当時の小樽の姿はどのようなものだったであろうか。秋田から小樽に移住して最初に住んだところは若竹町の海辺近くの一角であり、付近には三、四戸ずつかたまった漁師の家がまばらに点在するさびれた町だった。だが一家が住みついた明治四十一年五月から小樽港の第一期築港工事がはじめられ、彼の家の付近に監獄部屋が立ち、数百人の土工夫が連れて来られた。潮見台小学校に入学するころまでのわずか数年の間に彼の家の周囲には小さいながらも商店街や工場ができ、札幌から移転してきた大商学校も新築されたんとたくさんものに変わって、街一帯。一面いたれば全市はいえ作品のなかで与えようとした。そしてその実感とそ

いた。いまの小樽築港駅もそのころ建設された。また小学校を卒業するころ第一次世界大戦がぼっ発して北海道では農産物の輸出が増大、青えん豆やでん粉など数倍に暴騰して、それらの主要な積み出し港であった小樽にも戦争成金が生まれていた。

そして戦争景気から諸物価もあがり、街全体の空気は興奮でふくれあがるような活況にみちていた。これより少し前、当時小樽日報の記者だった白川豚木はこう書いている。『その街路の悪きことにいたってはげしく全くどうしようもない状態であった。一歩雨にたれば全市は泥海となり、人々は泥濘に足を取られながら行っていたのである。

◇　◇

多喜二は人々の苦しみを自分の問題として生きた。問題のすべてを文学上で処理しきれないと知ったとき実感運動に飛び込んだのだが、文学だけに限って

とんどドロ沼と化し、普通のゲタなど全然役に立たず。この比類なき悪路を、小樽人は物の数ともせずに疾駆しつつあり。しかり小樽人は歩行せず、常に疾駆す。小樽の生活競争の激じんなることほとんど白兵戦に似た

り『戦争景気にわく人々がいた反面、物価の騰貴から深刻な生活苦に直面し"白兵戦に似た激じんな生活競争"にあえぐ下層の人々も多かった。各地でストライキが起こっていた。多喜二はこれらの人々の苦しみを実感として受けとめ、彼の体臭とした"救い"は彼自身を救うためのものでもあった。彼は貧しい人々を救うという問題の解決をあくまで追い求めながら自分を成長させていったのである。

"狭い郷土根性でなしに小樽を描きたい"と彼はいったが、初期の作品を含め『一九二八・一五』『工場細胞』『地区の人々』など彼の代表作とされるすぐれた作品のなかで繰り返し"小樽"とそこに住む人々のづかいを主題とした。そしてその実感とそ

作品と郷土

たきこじ忌 ④

庶民の体臭を描く

愛し続けた北国の町

『転形期の人々』を書き始めたころの多喜二

多喜二が生活していた当時の小樽の姿はどのようなものだったであろうか。秋田から小樽に移住して最初に住んだところは若竹町の海辺近くの一角であり、付近には三、四戸ずつかたまった漁師の家がまばらに点在するさびれた町だった。だが一家が住みついた明治四十一年五月から小樽港の第二期築港工事がはじめられ、彼の家の付近に監獄部屋が立ち、数百人の土工夫が連れて来られた。潮見台小学校に入学するころまでのわずか数年の間に彼の家の周囲には小さいながらも商店街や工場ができ、札幌から移転してきた水産学校も新築されたんとなくにぎやかなものになりつついた。いまの小樽築港駅もそのころ建設された。また小学校を卒業するころ第一次世界大戦がぼっ発して北海道では農産物の輸出が増大、青えん豆やでん粉など数倍に暴騰して、それらの主要な積み出し港であった小樽にも戦争成金が生まれていた。

そして戦争景気から諸物価もあがり、街全体の空気は興奮でふくれあがるような活況にみちていた。これより少し前、当時小樽日報の記者だった石川啄木はこう書いている。『その街路の悪きことにいたってはけだし全国一なり。一雨いたれば全市ほとんどドロ沼と化し、普通のゲタなど全然役に立たず。この比類なき悪路を、小樽人は物の数ともせずに疾駆しつつあり。しかり小樽人は歩行せず、常に疾駆す。小樽の生活競争の激じんなることほとんど白兵戦に似たり』戦争景気にわく人々がいた反面、物価の騰貴から深刻な生活苦に直面し〝白兵戦に似た激じんな生活競争〟にあえぐ下層の人々も多かった。各地でストライキが起こっていた。多喜二はこれらの人々の苦しみを実感として受けとめ、彼の体臭としながら育っていったのである。

◇　◇　◇

多喜二は人々の苦しみを自分の問題として生きた。問題のすべてを文学上で処理しきれないと知ったとき実践運動に飛び込んだのだが、文学だけに限っていえば作品のなかで与えようとした〝救い〟は彼自身を救うためのものでもあった。彼は貧しい人々を救うという問題の解決をあくまで追い求めながら自分を成長させていったのである。

〝狭い郷土根性でなしに小樽を描きたい〟と彼はいったが、初期の作品を含め『一九二八・三・一五』『工場細胞』『地区の人々』など彼の代表作とされるすぐれた作品のなかで繰り返し〝小樽〟とそこに住む人々の息づかいを正確な筆致で描き出した。そしてその集大成とでもいうべき作品が未完で終わった『転形期の人々』である。ソビエトの作家ショーロホフの『静かなるドン』に感激し、そのような大河小説を意図して書きはじめた彼はこの作品のなかで小樽の全景をあますところなく描きつくしている。『港の水は青々と深くて、底が岩質だった。それで幾つにも折り重なった火山質の山が直ぐ後にせまっていた。――小樽の街はその山腹の起伏に沿って、海際を横に長く長く延びている』という書き出しにつづく小樽の街の描写は日本文学がこれまでに生んだ最も美しい叙景描写のひとつであるとさえいわれている。そして彼の目はそこで描かれている点景のすきまをぬいながら、人々の生活の上にゆっくりと落ちてゆくのである。

◇　◇　◇

多喜二のデスマスク

石銀を解雇され、上京して実践活動に奔走していた彼は、しきりに小樽をなつかしんだ。『ぼくが後にしてきた北の国はもうれしいまち、なつかしい町である』この多喜二は上京後、二度と小樽の街を見ることなく、短い生涯をあわただしく終わってしまった。ただ文壇的には本道を歩まなかったが、恵まれた構想力を駆使したまぎれもない近代文学の性格と、ゆるぎのない骨格を備えた彼の文学は、他の多くの作品が流れ星のように、またたきを消したなかにあって、死後二十七年かわらぬ光彩で輝きつづけている。

―おわり―

きのうの交通事故

（午後5時現在）

おくやみ（22）